

塩川 哲朗 提出 学位申請論文（課程博士）

『古代祭祀構造の研究』 審査要旨

#### 論文の内容の要旨

本博士論文は、古代祭儀に関する『延暦儀式帳』『延喜式』などの史料分析をとおして、古代律令国家の祭祀構造の基本を明らかにし、各神社との関係や宮中における天皇祭祀の原点を考察することを目的にしている。

その内容は、三部に分かれ、第一部「古代国家の祭祀構造」において四章、第二部「古代伊勢神宮の祭祀構造」において三章、「古代神祇伝承と古典解釈の研究」において二章と補論からなっている。

第一部「古代国家の祭祀構造」では、『神祇令』祭祀のうち、祈年祭・月次祭・広瀬籠田祭・相嘗祭を取り上げ、祭祀構造について考察する。第一章「古代祈年祭の祭祀構造」では、儀式次第や祝詞の分析から中央における班幣に朝廷側

の関心が集中した祭祀であり、各神社における幣帛奉納に関しては特に規定は設けられなかったことを明らかにする。また、伊勢神宮においても、祈年祭幣帛の奉納儀と在地における御田の耕作開始行事が連動せずに別構造となっていたことを指摘し、祈年祭はあくまで国家の祭祀であったとする。

第二章「月次祭・新嘗祭班幣の構造」では、中央における月次祭は、全官社を対象とする祈年祭に比して規模を縮小させた班幣祭祀であり、新嘗祭班幣は天皇親祭の前段行事として行うものであったことを考察する。伊勢神宮の月次祭には朝廷からの月次幣帛の奉納儀が組み込まれてはならず、本来の神宮月次祭は夜半の御饌祭と翌日の赤引御調系の奉納で完結するものであり、狭義の律令国家祭祀と天皇祭祀・神宮祭祀とは本来的に連動させたものではないことを論じる。

第三章「広瀬龍田祭の祭祀構造」では、広瀬社・龍田社の祭祀は、既存の奉斎氏族は存在せず、朝廷から王・臣が発遣され、合わせて大和の御県と山口の神々に幣帛が頒布される構造であり、その祝詞には「天下公民」の語が頻出し、

大和国の公民が作る作物の豊穰のために祭祀が執行されたことを考察する。

第四章「相嘗祭の祭祀構造」では、対象となる神社側の祭祀に朝廷側から幣帛がもたらされる構造となっており、祭祀の主体は神社側に存在し、古代神社祭祀の基本形態を、相嘗祭の祭祀構造から見出すことが出来るという。

第二部「古代伊勢神宮の祭祀構造」では、『延暦儀式帳』を素材に古代伊勢神宮の祭祀構造について論究し、第一章「古代伊勢神宮祭祀の基本構造」では、三節祭と神嘗祭例幣は天皇祭祀であり、祈年祭や神衣祭は国家祭祀とされた。また夜間に執行される御饌祭祀は、古代祭祀の古い形態を継承した構造となっており、在地における生産共同体に依拠する形で執行されていたことを論じる。さらに新しく設定された神郡や大神宮司を介する財源は、朝廷側によって既存の神宮祭祀を補助・拡充するために成立したものであったことを考察している。

第二章「古代神宮「日祈」行事の一考察」では、神宮における「日祈」行事について考察し、六月の夕御饌に奉献される糸は禰宜や内人の自給的な生産に基づいて供出されるものであり、祭祀の古態を示すものと考えられることを明

らかにする。その上で古代神宮祭祀は在地における生業の中で収穫された物品の奉獻を基本とし、朝廷側の財源に全てを依拠せず、独自性を維持しており、生業に基づいた祭祀が古代神社祭祀と神宮祭祀の原点であったことを推定する。

第三章「古代御饌殿祭祀に関する基礎的考察」では、外宮は御饌殿の存在が核となってその祭祀が構成されており、毎日天照大神に御饌を奉仕するために成立したものであると論じ、内外両宮はともに天照大神を祭るために構成されていたとする。

第三部「古代神祇伝承と古典解釈の研究」では、『古事記』『続日本紀宣命』『延喜式祝詞』に頻出する「みこともちて」「よさし」の語についての考察を行う。

第一章「「みこともちて」と「よさし」に関する基礎的考察」では、この語を天皇の天下統治を正統化するものとして「天つ神」と天皇との直接的な関係性を明示しているとされ、その背景には天皇による皇祖神への祭祀（天皇祭祀）が存在することを明らかにした。

第二章『高橋氏文』にみえる「よさし」の論理」では、『高橋氏文』におけ

る「よさし」の用例から、神に奉献する食膳はその神からもたらされたものであるという信仰を反映しており、古代において生業と神との関係性が一体であったことを想定する。

補論の「西田長男の「みこともちて―よさし」論」では、長く神道史研究に携わってこられた西田長男の「みこともちて」と「よさし」論に対する解釈をとおして、西田長男の学問研究とその思想性について論証する。最後の結論では「古代祭祀の基本構造」について総括している。

#### 論文審査の結果の要旨

古代の国家と神祇・神社の祭祀研究は、『神祇令』に規定される律令祭祀制を中心に進められ、七世紀後半の天武朝・持統朝に形成期が求められてきた。従来その研究の基本史料は『日本書紀』に基づいてきたが、『日本書紀』の記述が断片的であるため、推測の域を出ないことも多く、各祭祀の構造については十

分論証されてきたとはいえない。

神祇史・神道史研究において、祈年祭をはじめとした古代祭祀研究は、これまでに論文数は多いが、そのほとんどは宗教統制イデオロギー論に終始する論述であった。本論文は、こうした研究の方向性から離れ、古代祭祀の基本形態と構造を論証したものである。

本論文の成果の第一は、伊勢神宮の祭祀構造の分析を深化させたことである。古代祭祀研究の史料として、もっとも充実しているのは伊勢神宮である。平安時代初期、延暦年間に神宮から神祇官に提出された『延暦儀式帳』は、『皇太神宮儀式帳』『止由気宮儀式帳』の二書からなり、詳細な祭祀次第が記録されている。本論文第二部では同書を用いて伊勢内宮・外宮の祭祀・祭式を比較検討することにより、祭祀構造を浮き彫りにしたすぐれた論述構成になっている。

古代の伊勢神宮では祈年祭の幣帛奉献儀礼とは別に、御田の耕作開始行事が在地居住の奉仕者達によって行われているが、地元の御田の耕作開始行事は祈年祭幣帛奉納儀礼と連動するものではなく、神宮側における既存の農耕儀礼で

あった。また、禰宜は自身の家で養育した蚕の糸を六月月次祭の御饌に奉獻している。こうした在地奉仕者による御饌奉仕の構造は、国家によって設定された神郡や大神宮司に依存したのではなく、その成立以前に遡る要素をもち、自らの生業である農業・漁業・養蚕などに立脚していたことを論じた。この第二部の成果をもとに、第一部の相嘗祭など諸祭の祭祀構造につなげて論証されたのは、傍証の記録が少ないだけに、伊勢神宮の祭祀の事例が有効性をもっている。このように伊勢神宮における国家・天皇と在地との祭祀構成の二重構造は、神宮に限られたものではなく、各地域に鎮座する神社の祭祀構造に共通する内容であると論じたことは重要である。

古代において最も朝廷から重視された皇祖神を祀る伊勢神宮でさえ、祈年祭・月次祭の幣帛奉納が在地の祭祀・行事と連動していなかったことは、各地の神社においても同様の祭祀構造が構成されていたことを類推しており、その論議は納得のいく視点といえよう。

第三部では、近代の神道史学を構築した一人である西田長男の学問について

論じている。古代人は神をどのように信仰していたのか。このことを西田長男は、世俗の歴史の中から抽出を試みたという。本論文においても、古代の人々が祭祀を行うその行動の中にこそ、実体的な神祇信仰が表現されていると見ており、西田長男の神道史学を高く評価する立場にある。本論文の成果を踏まえて、今後の研究の広がりが見込める。

近年の古代神祇祭祀の研究では、官社制度の実態を低く捉える見解や災害と崇りの循環的関係性、また委託祭祀論や祭祀権の二重構造論など、新たな研究の指針が示されているなかで、本論文の古代祭祀構造論は、今後重要な学説の一つになるものと思われる、高く評価することができる。

以上の理由から、本論文提出者塩川哲朗は、博士（宗教学）の学位を授与されるべき資格があるものと認められる。

平成二十九年十二月十三日

主查	國學院大學教授	岡田莊司	印
副查	國學院大學教授	笹生衛	印
副查	國士舘大學教授 國學院大學學院兼任講師	藤森馨	印

塩川 哲朗 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（宗教学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十九年十二月十三日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	岡田 莊 司	印
副査	國學院大學教授	笹 生 衛	印
副査	国士舘大学教授 國學院大學大学院兼任講師	藤 森 馨	印